

「一樹の陰かげ一河の流も他生の縁ゆかりと言われているようですが、みな「二期一會いちごいちえ」佛様の縁ゆかりに繋がればと思います。病も色々の縁ゆかりによりましよう。我々の肉体を家屋に置き換えて考えてみましよう。よく解わかると思ひます。新築の時から不具合の生じた家であれば、生まれた時から病を持っていたと言う事になります。家も古くなれば当然あちこちと手を入れる必要にせまられます。我々の身体も家のリホームと同じ様に病おかに冒されてきます。そこで医者にかかり、手当てをしてもとの身体にして頂くのです。お釈迦様の教えは因縁因果が基本です。原因があるから結果が必ずある、結果があればその原因が必ずあるということ。私はお釈迦様の教え「因縁因果」とは言いかえれば全てが「繋つながりの法則」に因よって成り立っていると云えること。以前から申し上げます様に佛様の教えは血統の繋がり、子を宿した時の宿命から始まり、御先祖様から我が魂を頂き此の世の生活が始まるのです。そして人間関係のみに止まらず、あらゆる動きに繋がりをもち、結び付きの作用に発展するのです。

我々の「二挙一動じゆげつどう」は結び付きの作用により結果が表れる事になります。そこに佛様が智慧みぎを磨みがきなさいと言われる所以ゆえんがあるのです。多くの人々は目で見て行動を起します。勿論思考力も發揮します。そこで皆様、私達の目の前にもう一つの鏡を兼ねたレンズがあると云って下さい。このレンズを通る時に繋がりを発する物に糸を結ぶべきか？結ぶべきでないか？」の判断を間違えないようにする為のレンズなのです。このレンズの役割をするのが佛の智慧なのです。良い事には繋がりあやまの糸を太く結び、悪い事には繋がりあやまの糸を切り深みにハマらないように注意してくれるのです。過あやまちを犯さない為に素晴らしいレンズを身につける必要があります。先程の話のように我々は夫婦と成るところから出発します。夫婦となり、始めて太い糸で結ばれやがて懐妊し臍へその緒おを通し十月を母の胎内で過あやまごし出産へと至るのです。世に出た子供の出来不出来は先祖の敬うやまいに機縁きえんしているとも思えます。なぜならば我々は魂を先祖から頂くからです。

神佛でない我々の人生「二寸先は闇」です。どんな繋がりあやまを頂き、どのように結べば良いのか？又は結ぶべきでは無いのか？智慧みぎを磨みがくにも、人間それぞれの努力の及ばざる事もございませう。そこで、我々は古来より、神佛かみぶつに帰依きえし、大難は小難に小難は無難にと供物を献上してお願い申し上げているわけです。供養くやうとは字の如く私は佛様にこれをお供くわえしますから、この功德を以って私を養やしなって下さいと言ひ意味です。信心も実のなる信仰として精進せましよう。二十四年十月一日